

このコーナーでは、町にゆかりのある歴史人物とその結び付きなどをシリーズで紹介していきます。執筆者は町史編さん委員の佐藤仁志さん（豊間根・七）です。

手県知事を訪ね賛同を得た。

明治四十年、笠井信一岩手県知事に提出された補助申請書には発起人代表として横山久太郎釜石山田中製鉄所長以下五十三人の名前が記され、気仙郡三十六人、九戸郡三人、上閉伊郡六人、下閉伊郡八人で、宮古町から中島新太郎、菊池長右衛門、菊池和七、横坂権七。山田町から中野健次郎町長、萬藤九郎（商業）、上野六之

課長、下閉伊郡長を歴任）。取締役の一人に中野健次郎山田町長（五十五歳、飯岡村出身、郡役所や山田村役所書役、戸長、村議会議員などを歴任）。監査役の一人に山田町の萬藤九郎（商業）が選ばれた。

会社は資本金三十万円で地元資本が九〇％を占めた。かくて明治四十一年四月、三陸汽船（株）が創立した。木造貨客船の東北丸・振興丸・黄金丸・笠井丸（いずれも一四五ト）を建造し

三陸汽船（株）の創設と

横山久太郎

助（商業）、貫洞幸七（商業、町議会議員）の名前が出ている。

明治四十年八月、三陸汽船（株）設立発起人総会で役員が決定、取締役社長に横山久太郎（五十一歳、静岡県出身で製鉄所初代所長、釜石電灯、岩手軽便鉄道社長を歴任）。常務取締役に北田親氏盛岡市長（四十九歳、盛岡市出身、警察署長、県勸業

沿岸航路、東京航路、北海道航路と発展した。明治四十四年、東京湾汽船（株）は権利を三陸汽船（株）に譲渡し姿を消した。

沿岸航路の寄港地は宮古―山田―大槌―釜石―小白浜―越喜来―大船渡―細浦―高田―気仙沼―鮎川―塩釜で毎日一往復。大正二年の乗客数は宮古四千六百二十六人、山田三千四百三十一人、大槌二千七百五十二人、釜石九千四百四人、塩釜一万五千百一人（七港省略）で、全体で五万四千七百三十九人である。三陸汽船は多くの人、物資を輸送し、産業、経済、文化の発展に大きな役割を果たした。

町長室から

「事実小説よりも奇なり」といわれますが、戦時死亡宣告を受けた洋野町出身の上野さんが六十二年ぶりに一時帰国したニュースで、まさにその言葉を思い起こしました。これまでの年月、どのようなドラマがあったのでしょうか。報道によれば上野さんは「日本の桜が見たかった」と語ったとか▼桜といえば本コラムでも時々桜の話題を載せていますが、それによれば、平成十四年は「役場前の桜が、四月十七日の強風でほとんど散った」、平成十六年は「四月十八日の消防演習のころが満開」となっています。今年の開花がいかに遅れたかが分かります。広報が配布されるころ、桜はまだ咲いているかもしれませぬね▼五月十四日上映予定の映画「待合室」にも美しい桜のシーンが出てきます。岩手を舞台にした素晴らしい映画ですので、一人でも多くのご鑑賞をお薦めいたします。

山田町長 沼崎喜一



山田湾に停泊する三陸汽船
(写真提供：山田町教育委員会)

明治三十九年、気仙銀行建築のため同銀行重役および株主などが高田町に集合した際、三陸汽船のことが提議され賛成を得た。早速、銀行重役、株主が郡内外の

岩手県沿岸に東京湾汽船（株）の汽船が就航していたが、経営の主体が県外の所管で制約もあり、不便であった。

有力者をはじめ石巻、塩釜および仙台の実業家、仙台市長、岩

長、萬藤九郎（商業）、上野六之